

クリティカルケア領域における家族看護の研究動向 —質的研究と量的研究の傾向の比較—

迫田典子¹⁾ いたうたけひこ²⁾ 城丸瑞恵³⁾

¹⁾ 昭和大学保健医療学部看護学科

²⁾ 和光大学心理教育学科

³⁾ 札幌医科大学大学院保健学研究科

要 旨

本研究では、日本のクリティカルケア領域における家族看護に関する研究動向を把握し、とくに質的研究と量的研究を対比した。医学中央雑誌データベース Web 版 (Ver.5) を用いてクリティカルケア・家族看護などを条件式とすると、国内のクリティカルケア領域における家族看護の研究は過去 27 年間に 109 件であった。そのうち過去 11 年 (2001~2011 年) に学術誌で発表された 105 件の原著論文のタイトルを分析対象とした。Text Mining Studio Ver.3.2 にて論文タイトルに特徴的な単語を分類した。研究数は 2001 年以降増加しており研究手法は、初期には質的研究が優位であったが、2009 年~2011 年には質的研究が盛んに行われるようになった。質的研究では「思い」「緊急入院」量的研究では「ニード」「調査」を含むタイトルが特徴であった。発表された学術雑誌上位 4 件はクリティカルケア領域の看護学会誌であった。CINAHL 検索による海外の研究では 2009 年以降より論文数が急増した。質的研究が量的研究の数を勝っている傾向は同時代の日本と共通していた。日本の質的研究では家族の心理的側面について、量的研究ではニードについて既存または独自のツールを用いた研究が多かった。日本でも今後は患者を研究対象にした研究を行い、多角的な視点より、さらに効果的かつ効率的な支援方法を導き出すことが必要である。

Key Word: クリティカルケア、家族、看護、テキストマイニング

緒 言

クリティカルケアを受ける患者は、生体侵襲の大きい手術後の術後管理や、急激な病状の発生および悪化のために集中治療を受ける。家族もまた心理的な危機状態にある。クリティカルケアに携わる看護師にとって、家族に対する援助も重要な役割である。家族の一員が生命の危機状態に陥ることは、家族全体の統合性を大きく揺るがすものであり、家族システム全体の危機である¹⁾。日本集中治療医学会は、2005 年の「集中治療に携わる医師の倫理綱領」を反映して 2011 年 5 月に「集

中治療に携わる看護師の倫理綱領」を策定した。この中で「集中治療領域における終末期患者家族のこころのケア指針」が発表され、倫理の視点よりクリティカルケア領域の家族支援の必要性を強調した。しかし臨床の場面では、十分な支援が実施できていない状況にあると考える。理由として救急現場の看護では、多くのエネルギーが患者の救命のために用いられ、家族の援助が後回しにされがちになる²⁾。また病状の経過によって、家族が患者の代わりに治療の意思決定を担う役割があり、それに対する支援の困難性や苦手意識を持つ

看護師がいることが予測される。このような背景から、クリティカルケア領域の家族看護についてより具体的な方法の確立が望まれる。そのため、本研究はクリティカルケア領域の家族看護の質的向上に対する基礎的資料とするために、これまでの研究動向と今後求められる研究内容について明らかにすることを目的とする。

方 法

1.分析対象

医学中央雑誌データベース Web 版 (Ver.5) を使用し、1985 年から 2011 年までの 27 年間に学術誌で発表された原著論文を対象とした。条件式はクリティカルケア and 家族看護 (51 件)、クリティカルケア and 家族介入 (1 件)、クリティカルケア and 家族支援 (51 件)、ICU and 家族看護 (269 件)、ICU and 家族介入 (6 件)、ICU and 家族支援 (271 件)、CCU and 家族看護 (20 件)、CCU and 家族介入 (0 件)、CCU and 家族支援 (18 件)、SCU and 家族看護 (3 件)、SCU and 家族介入 (0 件)、SCU and 家族支援 (3 件)、HCU and 家族看護 (6 件)、HCU and 家族介入 (0 件)、HCU and 家族支援 (7 件)、救急看護 and 家族看護 (96 件)、救急看護 and 家族介入 (5 件)、救急看護 and 家族支援 (96 件)、緊急入院 and 家族看護 (120 件)、緊急入院 and 家族介入 (1 件)、緊急入院 and 家族支援 (122 件)、重症患者 and 家族看護 (29 件)、重症患者 and 家族介入 (0 件)、重症患者 and 家族支援 (29 件) であった。医学中央雑誌の集録方法により論文タイトル中にこの検索式の単語が含まれないことがある。また原著論文は雑誌によって掲載基準が異なるが、本研究では医学中央雑誌の分類にそって分析を行った。

調査時期は 2012 年 3 月。対象となる論文のうち、1994～2000 年は 4 件のため、今回はクリティカルケア領域における認定・専門看護師の教育が開始された 2000 年以降を研究対象時期とする。すなわち 2001～2011 年に出版された 105 件の原著論文を分析対象とした。それぞれの条件式で重複して抽出した文献は 1 件とみなしている。次に、抽出した文献は質的研究と量的研究に分類

してその相違を分析した。なお、看護の特殊性により小児・母性看護領域を除き成人・老年看護領域を対象とした。

2. テキストマイニングによる分析

まず論文タイトルをテキスト化し、Text Mining Studio Ver.3.2 により、テキストマイニングの手法を用いて内容語の分析をおこなった。1 論文を 1 行として入力した。分析手順は (1) テキストの基本統計量 (基本情報)、(2) 単語頻度分析、(3) 特徴語分析を行った。単語頻度分析とは、テキストに出現する単語の出現回数をカウントするものであり。本研究は検索を行った文献のタイトル全ての中から、頻度の高い単語をカウントした。また特に時系列的な出現回数の状況、家族看護に関連する単語の状況を把握することを中心に分析を行った。特徴語分析とは、データに付随する属性ごとに、特徴的に出現する単語を抽出することであり、質的研究と量的研究別々に文献タイトルの頻出単語の比較を行い研究手法によるタイトルの傾向を把握した。

3. 研究手法別の特徴に関する分析

テキストマイニングの分析結果、質的研究で用いられていた頻度の多い単語と量的研究で用いられていた頻度の多い単語の研究動向を把握するために、論文内容を確認してその相違について分析した。

4. 海外研究との比較

海外における研究動向との比較を行うため、CINAHL で「critical care」and 「family」、「emergency care」and 「family」+ 査読式の論文+筆頭者を看護師として 1985～2011 年の 26 年間で検索を実施し、質的研究と量的研究の数、内容について明らかにした。

5. 倫理的配慮

本研究はヒトを対象としたものではなく、既に公刊されている論文のタイトルなどの分析であるので、倫理的配慮は特に必要がない。

結 果

1. 研究数の年次推移と研究対象

2001年～2011年105件の年次推移は表1のようになった。2001年以降に急激に増加しており、2006年以降毎年10件前後の発表が行われている。質的研究では2006年以降毎年7件前後の発表されている。量的研究では2005年より毎年6件前後発表されていたが2010年より減少傾向である。質的研究と量的研究数の差は年度によりばらつきがあるが総数では殆どない状況である。

研究対象者は家族64%、看護27%、家族・患者は6%、論文研究が3%であり、患者を含めた研究は行われていなかった。

2. 発表誌

発表掲載数が多い上位5件は、日本看護学会論文集・成人看護I、日本クリティカルケア看護学会誌、日本救急医学会雑誌、日本救急看護学会雑誌、日本看護研究学会雑誌でクリティカルケア領域の看護学会誌に多く掲載されていた。

表1. 研究の年次推移

(左側は2000年まで、右側は2001-2011年)

年	研究数	質的研究	量的研究	年	研究数	質的研究	量的研究
1994	1	0	1	2001	8	2	6
1996	1	1	0	2002	2	0	2
1998	2	2	0	2003	6	3	3
合計	4	3	1	2004	5	4	1
				2005	6	1	5
				2006	13	9	4
				2007	15	7	8
				2008	17	8	9
				2009	13	7	6
				2010	12	8	4
				2011	8	6	2
				合計	105	55	50

3. 文献のタイトルのテキストマイニング

1) 基本情報

テキストマイニングの分析において、原著論文の題名における基本情報より、対象論文105件中、題名の文字数の平均は25.5文字であった。内容語の延べ単語数は701で、単語種別数は370種類だった。タイプ・トークン比は0.528と比較的高い。

2) 単語頻度分析

単語頻度分析とは、テキストに出現する単語の出現回数をカウントすることによる分析である。

表2は単語頻度分析であり、105件の論文タイトル中で全体頻度が6以上の単語頻度表を表してい

る。「家族」は38個、「患者」は21個、「ICU」20個数、「ニード」「看護師」は17個、「患者家族」は13個、「分析」は12個、「家族援助」10個、「緊急入院」「思い」は8個、「援助」「家族看護」等がそれぞれ7個、「ICU入室患者」と「コーピング」等がそれぞれ6個だった。

表3は論文タイトルの中で全体頻度が3以上の単語頻度表を表している。質的研究では「患者」21個、「援助」7個、「家族」38個、「緊急入院」「思い」が8個、「インタビュー」「研究」等が3個であった。量的研究では「ニード」17個、「ICU入室患者」「重症患者家族」「調査」6個、「看護師」17個、「ニーズ」「満足度」5個等であった。

3)特徴語分析

特徴語分析とは、群において特徴的に出現する単語及び係り受け表現を抽出する分析である。補完類似度を用いて特徴語を表している。質的研究に特有な単語では「思い」「緊急入院」、量的研究に特有な単語では「ニード」や「調査」といった単語がみられた。

4. 研究手法別におけるタイトルの内容の分析

テキストマイニングの結果より質的研究に特有な単語として「思い」「緊急入院」、また量的研究に特有な単語として「ニード」「調査」がタイトルに含まれていたため、それらの論文に関する内容の分析を行った。

1) 質的研究：「思い」「緊急入院」がタイトルに含まれている論文

タイトルに「思い」、「緊急入院」、「思い」＋「緊急入院」が含まれている論文はそれぞれ5件、7件、2件であった。研究対象者は「思い」では家族3件、看護師2件、「緊急入院」では家族4件、看護師3件、「思い」「緊急入院」では家族2件であった。

内容は「思い」では、入院前から入院後までの家族の思い³⁾、医療者に不信を抱く家族の思い⁴⁾、などであった。また看護師を対象として終末期の家族への思い⁵⁾や入院中の家族への精神的な思い⁶⁾に対するものがみられた。「緊急入院」では、家族の医療者に対するニーズ⁷⁾、緊急入院した家族の心理を推測する⁸⁾ことであった。看護師の予期悲嘆への支援⁹⁾、介入全般¹⁰⁾に関する研究もみられた。これら多くは半構成面接を用いて行い内容分析を行い研究対象が家族と看護師であり、患者を対象とした研究は行われていない。

2) 量的研究：「ニード」「調査」がタイトルに含まれている論文

タイトルに「ニード」、「調査」、「ニード」＋「調査」を含んでいる論文は、それぞれ15件、9件、2件であった。対象者は「ニード」では家族14件、看護師1件であった。「調査」では家族7件、看護師1件、家族と看護師双方を対象（以下家族・看護師対象）とした研究が2件であった。「ニード」＋「調査」では家族・看護師対象が1件だった。

表 2. 論文タイトル中の単語頻度解析（全体頻度 6 以上）

単語	品詞	頻度	単語	品詞	頻度
家族	名詞	38	援助	名詞	7
患者	名詞	21	家族看護	名詞	7
ICU	名詞	20	検討	名詞	7
ニード	名詞	17	認識	名詞	7
看護師	名詞	17	ICU入室患者	名詞	6
患者家族	名詞	13	コーピング	名詞	6
分析	名詞	12	現状	名詞	6
家族援助	名詞	10	集中治療室	名詞	6
緊急入院	名詞	8	重症患者家族	名詞	6
思い	名詞	8	調査	名詞	6

表3. 論文タイトルに特有な単語頻度 (論文数・全体頻度3以上)

質的研究			量的研究					
単語	品詞	全体頻度	単語	品詞	全体頻度	単語	品詞	全体頻度
患者	名詞	38	ニード	名詞	17	違い	名詞	3
援助	名詞	21	ICU入室患者	名詞	6	情報提供	名詞	3
家族	名詞	20	重症患者家族	名詞	6	対応	名詞	3
緊急入院	名詞	17	調査	名詞	6	家族援助	名詞	10
思い	名詞	17	看護師	名詞	17	コーピング	名詞	6
インタビュー	名詞	13	ニーズ	名詞	5	集中治療室	名詞	6
研究	名詞	12	満足度	名詞	5	ICU入室患者家族	名詞	4
行う	名詞	10	現状	名詞	6	試みる	名詞	4
体験	名詞	8	検討	名詞	7	実態	名詞	4
			認識	名詞	7	面会時	名詞	4
			アンケート調査	名詞	3	用いる	名詞	4

「ニード」では患者家族のニードに対する内容が多く、家族の満足度調査¹¹⁾、CNS-FACEスケール¹²⁾等を用いて家族のニードを把握していた。看護師対象の場合も家族のニーズに対する看護師の認識を把握していた¹³⁾。「調査」では家族対象の場合、面会時に看護師に求めているニード¹⁴⁾や緊急入院後の支援について家族への満足度調査¹⁵⁾での内容が多かった。看護師を対象とした研究ではエンゼルケアの現状と課題について明らかにしていた¹⁶⁾。家族・看護師対象では、ICU・HCUでの肺がん手術直後の面会時における看護介入¹⁷⁾や看護ケアマニュアル作成のために家族看護に対する家族と看護師の思い¹⁸⁾についての調査であった。「ニーズ」「調査」では看護師の支援が家族のニーズに沿われているか Molter の重症患者家族のニードを用いてアンケートを実施していた¹⁹⁾。質的研究同様、家族看護に関連した患者を対象とした研究はみられないことが示された。

5. 海外におけるクリティカルケア領域での家族看護に関する研究の検索結果

CINAHL での分析結果では 2009 年以降に文

献数が増加している。特に 2010 年は 31 件であった。研究方法別では 2009～2011 年の 3 年間で質的研究 34 件、量的研究が 19 件、トライアングレーション 1 件であった。研究対象者は家族 25 件。看護師 2 件、患者が 5 件。内容として質的研究では、集中治療室での家族のニード把握²⁰⁾、外傷患者家族の経験²¹⁾、看護師の体験²²⁾や介入方法の検討²³⁾に関して半構成面接法を用いた研究が多数を占めた。量的研究では医療に対する満足度²⁴⁾、終末期患者の家族のケア²⁵⁾について既存及び独自の測定ツールを用いていた。患者を対象とした研究は ICU で人工呼吸器装着中における家族の存在について²⁶⁾、面会時間や面会中の家族への満足度について調査を実施していた²⁷⁾。

6. 日本における量的研究から質的研究の論文数バランスの変遷

2001 年～2011 年の 105 件を 3 つの時期に区分して質的研究と量的研究の比率を検討したところ量的方法優位の時代から質的方法優位の時代への移行が見られた。

2001 年～2005 年では質的研究 10 件(37%)、

量的研究 17 件 (63%) で量的研究が優位だったが、2006 年～2008 年では質的研究 24 件 (53%)、量的研究 21 件 (47%) とほぼ同数となり、2009 年～2011 年では質的研究 21 件 (64%)、量的研究 12 件 (36%) と比率が逆転して質的研究の件数が量的研究のほぼ 2 倍となった。時期と質的研究の比率増加との関係は、Cramer の $V = .201$ (相関係数に相当) であった。これをノンパラメトリックの順位尺度による Somers の d により検定したところ、 $d = -.164$ 、近似有意確率 $p = .037$ で有意であった。残差分析をすると 2001 年～2005 年では量的研究の比率が大きく、2009 年～2011 年では質的研究の割合が大きいう傾向が明らかになった。

考 察

1. 年次的推移による研究傾向

クリティカルケア領域での家族看護に関する研究は 2001 年以降増加し始めており、特に 2006 年以降は年間 10 件前後の発表が行われている。要因として 1994 年に家族看護学会設立、2000 年前後よりクリティカルケア領域での認定・専門看護師の養成が開始となり、家族看護の必要性の認識が高まってきたと考えられる。また質的研究と量的研究の発表数は全体ではほぼ同数であったが、時代別に観ると、量的研究が盛んな時代 (2001 年～2005 年) から、質的研究優位の時代 (2009 年～2011 年) へ移行したという事実が確認された。この要因としては仮説的に以下のように考えられる。すなわち、クリティカルケア領域における高度実践看護教育の開始直後の時期は、家族の実態や看護介入の現状を把握するために、客観的データが得られる量的研究優位がであったのだろう。その後、高度実践看護教育開始後 10 年が経過した。それに伴って、今までに得られた研究内容や看護介入の評価や今後の課題、方向性について明らかにするため質的研究が盛んになったと推測される。

質的研究の場合、家族の心理面・社会面に関する理解や看護師の支援内容に関する評価について多く行われていた。量的研究の場合、はじめの頃は家族のニーズを把握するために海外で開発され

たニード測定尺度を用いている内容が多かった。しかし徐々に山勢らが²⁸⁾ 開発した「CNS-FACE 家族アセスメントツール」が、新しい測定尺度として浸透してきている。看護師自身を対象とする研究では家族看護の実際について、質問紙を用いた調査が多かった。そのような質問紙調査により看護計画や支援内容について評価、修正するための基礎となり介入に結びつけていたと推測される。家族と看護師の両方を対象とする研究の場合、論文件数は 7 件とまだ少ないことが明らかとなった。今後は研究対象として、双方の関係を研究内容において考慮していく必要があると考える。

2. クリティカルケアにおける家族看護の掲載誌

家族看護に関する論文の掲載誌は、クリティカルケア領域の学会誌が上位 4 位であるが、掲載基準は各学術誌により異なるため掲載数だけで単純に比較はできない。クリティカルケア看護学会が 2004 年設立後は、ほぼ毎年掲載されてきている。それに加えて、現在では、多くの学術誌でクリティカルケア看護の論文が発表されている。研究発表の場が拡大してきていることが本研究から明らかになった。

3. 質的研究と量的研究のタイトルの対比

質的研究では、「緊急入院」「思い」をタイトルにした研究が多くみられた。「緊急入院」は家族にとって突然の出来事で、家族の組織力を低下させる状況的危機に陥るため入院時より看護介入が必要となる。「思い」は入院後の経過が急変しやすく、家族も動揺して、かつ入院前後の情報も少ないことから介入を困難にさせる要因となるため適切な介入を行うために研究が多いと考える、また、個別性があり測定が難しいので、インタビューを用いて質的に個々の事例の様相を探索的に明らかにした研究が行われていることが見いだされた。

量的研究では「ニード」「調査」を題名にした研究が多くみられた。「ニード」は入院期間中の家族の心理状態について測定尺度を用いて把握し明らかにした研究が多く、看護介入の基礎情報として捉えていた。「調査」はクリティカルケアの様々な状

況下における家族、看護師の意識調査や満足度を明らかにしていた。つまりニーズや家族看護についての現状を把握するために測定尺度を用いることで客観的に捉えられる。また他の研究の結果と比較することが出来るため、研究結果の信頼性が得られることより量的研究手法で研究が行われていることが見出された。

質的研究では「患者」、量的研究では「ICU入室患者」が含まれた論文タイトルが見られたが、論文内容をみると研究対象に含まれていなかった。今後は患者の視点からみた看護師の家族支援に対する評価、家族への思いについての研究を行うことで、多角的に家族介入方法について明らかになると考える。

4. 海外のクリティカルケアの家族看護に関する文献と和文文献との比較

質的研究では集中治療室での家族の心理的側面に関する研究が多く、緊急入院という状況に関する研究は少なかった。特殊な治療環境が患者及び家族に及ぼす影響を明らかにしていたことが特徴的であった。量的研究では測定ツールを用いて家族への情報提供に関する研究が多く、情報及び保証のニーズが充足出来ることで家族が危機的状況を回避出来ると認識され、介入方法に結び付いていると考えられる。研究対象では患者の体験を明らかにするための研究がされており、治療やケアを通じて家族への思いを明らかにしていた。海外と日本における研究対象の相違の要因として、患者は家族成員の中の一人として捉える日本と、患者は家族成員の一人ではあるが、個人として捉えている海外での家族の認識の違いが研究対象選定に影響している。これは海外文献の特徴的な部分であり、日本での家族介入に求められる新しい視点になる。質的研究と量的研究との比率を海外と比較すると、日本における2009年～2011年は質的研究の割合が量的研究のほぼ2倍であり、海外の比率とよく相似しているという傾向が確認された。

5. 本研究の限界と今後の課題

本研究は論文タイトルに基づき質的・量的研究手法別に研究動向を概観した。次に各手法別に論文内容を確認した。これまでの研究の傾向と今後クリティカルケア領域に必要な家族看護の研究の方向性が明らかになったことは意義がある。しかし個々の論文の詳細な論文内容の分析には踏み込んでいないため限界がある。渡辺は、クリティカルケア領域での家族の特徴として、突然の出来事に各家族成員が激しく混乱し、深刻な危機に陥りやすいことを指摘し、そのために家族看護の視点が求められていると述べている²⁹⁾。Burr,G.は、すでに15年前にクリティカルケアにおける看護師の役割の中に家族支援が必要であることが指摘されている³⁰⁾。今後の研究の発展方向として、研究対象には家族、看護師に加え患者も含め、その関係に留意した研究を行うことで家族への介入及び支援方法がさらに具体的に明らかになることが期待される。

結 論

1. 日本のクリティカルケア領域における家族看護の研究は過去27年間に109件であった。研究数は2001年以降増加しており研究手法は、初期には質的研究が優位であったが、2009年～2011年には質的研究が盛んに行われるようになった。質的研究では「思い」「緊急入院」量的研究では「ニーズ」「調査」を含むタイトルが特徴であった。
2. 発表された学術雑誌上位4件はクリティカルケア領域の看護学会であり、今後は発表の場が拡大していくと考えられる。
3. 海外の研究では2009年以降より急激に増加し、質的研究が量的研究の数を勝り、この傾向は同時代の日本と共通していた。質的研究では家族の心理的側面について、量的研究ではニーズについて既存または独自のツールを用いた研究が多かった。研究対象は患者も含めた研究も存在していた。
4. 日本でも、今後は患者と家族と看護師の関係に

留意した研究を行うことで、多角的な視点より効果的な支援方法が導き出されるために必要である。

文 献

- 1) 池松裕子：クリティカルケア看護の基礎—生命危機状態へのアプローチ（第1版），8-9，メヂカルフレンド社，東京，2003.
- 2) 早坂百合子：患者と家族の心理，救急看護—急性期病態にある患者のケア（第1版），85-90，医歯薬出版，東京，2001.
- 3) 橋田由吏，大森美津子：救急重症患者家族の思いと行動 搬入前・初療時・入院後，日本クリティカルケア看護学会誌，1(3)：46-59，2006.
- 4) 新山悦子，天本夏代，岡本真由美他：医療者に対する不信感を持つ心筋梗塞患者の家族の思い，看護・保健科学研究誌，8(1)：221-230，2008.
- 5) 稲谷理沙，田中真弓，磯本暁子他：ICU での看取りと死を迎える患者・家族に対する看護師の思いの分析，日本看護学会論文集成人看護 I，37：128-130，2007.
- 6) 吉川朱実，山川留美，内山道子：ICU における患者・家族に対する精神面への関わり 看護師の思いを分析して患者・家族に対する精神面への関わり，日本看護学会論文集成人看護 I，39：178-180，2009.
- 7) 竹内真由美，緊笹倉頼子，内橋裕美他：緊急入院した患者の家族の医療従事者に対するニーズを知る Molter のニーズ論を使って，日本看護学会論文集成人看護，33：27-29，2003.
- 8) 矢野由香里，田中康代，青木恵美：ICU に緊急入室した患者家族の心理の考察. 日本クリティカルケア看護学会誌，1(3)：46-59，2006.
- 9) 中村祐司：ICU へ緊急入院患者の家族に対する予期悲嘆への援助，日本看護学会論文集成人看護 I，34：114-116，2004.
- 10) 市川容代：緊急入院された患者を支える家族支援のあり方 看護師のかかわりを振り返って，日本精神科看護学会，51(2)：168-172，2008.
- 11) 草場俊哉，一ノ宮典子，永田美香他：救命救急センター入院患者の家族援助の実際 患者家族のニーズの重要度と満足度調査を試みて，日本看護学会論文集成人看護 I，31：51-53，2001.
- 12) 大上晋太郎，中下恵，秋山智他：入室経路の違いによるICU入室患者の家族のニーズとコーピングに関する調査 CNS-FACE に基づく分析を通して，日本看護学会論文集成人看護 I，38：39-41，2008.
- 13) 高木由美子，佐藤はるみ，佐東浩子他：集中治療室に入室した患者の家族への援助 ニーズにそった情報提供を試みて，日本看護学会論文集成人 I，32：57-59，2002.
- 14) 今川博子，福嶋望美，上岡澄子：面会制限のないICUにおける患者家族のニーズ，日本看護学会論文集成人看護 I，37：146-148，2007.
- 15) 井上美穂，小林慶子，佐藤文子他：ICU 入室患者家族の面会ニーズ 患者家族・看護師の意識調査から，日本看護学会論文集成人看護 I，31：57-59，2001.
- 16) 福田友秀，平山明生，増子香織：クリティカルケア領域におけるエンゼルケアの現状と課題 看護師へのアンケート調査からの分析，日本看護学会論文集成人看護 I，39：24-26，2009.
- 17) 岸ひろみ，保田佳紀，下小牧明香他：ICU・HCUにおける手術終了後の面会方法と看護介入について考える 面会に対する家族ニーズの実態調査から，家族看護学研究，12(3)：125-132，2007.
- 18) 湯口奈見子，浦野瞳，古屋章子：「ICU 家族看護ケアマニュアル」の作成を目指して ICU 入室患者の家族に対する満足度調査の結果から，日本看護学会論文集成人看護 I，38：194-196，2008.
- 19) 川邊亜由美，清水小百合，戸谷真由美他：ICU 面会時における看護師の対応に関する家族の要望 「モルターの重症患者家族のニーズ」を利用したアンケート調査，日本看護学会論文集成人看護 I，40：50-52，2010.
- 20) Frizon, G., Nascimento, E. R. P., Bertocello, K. C. G. et al. Familiares na sala de espera de um unidade de terapia intensiva: Sentimentos revelados. Rev Gaúcha Enferm., Porto Alegre in the waiting room of an intensive therapy

- unit: (RS), 32(1):72-78, 2011 (Family members in Feelings revealed).
- 21) Verhaeghe, S. T. L., vanZuuren, F. J., Grypdonck, M. H. F., et al. The focus of family members' functioning in the acute phase of traumatic coma; Part One: the initial battle and protecting life. *Journal of Clinical Nursing*, 19, 574-582, 2010.
- 22) Shorter, M., Stayt, L.C. Critical care nurses' experiences of grief in an adult intensive care unit, *Journal of Advanced Nursing*, 66(1): 159-167, 2010.
- 23) Davidson, J. E, Daly, B. J, Agan, D, et al. Facilitated sensemaking: A feasibility study for the provision of a family support program in the intensive care unit. *Critical Care Nursing Quarterly* 33(2): 177-189, 2010.
- 24) Ekwall, A., Gerdtz, M., Manias. E. Anxiety as a factor influencing satisfaction with emergency department care: Perspectives of accompanying persons. *Journal of Clinical Nursing* 18(24):3489-3497, 2009.
- 25) Roberti, S. M., Fitzpatrick, J. J. Assessing family satisfaction with care of critically ill patients. *Critical Care Nurse* 30(6):18-27, 2010.
- 26) Henao Castaño, Á. M. Sentirse apoyado: Experiencia de pacientes en ventilación mecánica sin efectos de sedación continua. *Index de Enfermería [Index Enferm]* (edición digital), 19(2-3), 120-123, 2010.
<http://www.index-f.com/index-enfermeria/v19n2-3/7134.php>
(Experience of patients in mechanical ventilation without continuous sedation effects)
- 27) Hardin, S. R., Bernhardt-Tindal, K. Hart, A., et al.: Critical-care visitation: The patients' perspective. *Dimensions of Critical Care Nursing* 30 (1): 53-61, 2011.
- 28) 山勢博彰:重症・救急患者家族のニードとコーピングに関する構造モデルの開発 ニードとコーピングの推移の特徴から, *日本看護研究学会雑誌*, 29(2): 95-102, 2006.
- 29) 渡辺裕子:救急医療・集中治療の場における家族看護, 渡辺裕子, 鈴木和子著, *家族看護学理論と実践* (第2版), 169-171, 日本看護協会出版会, 東京, 1999.
- 30) Burr, G. The family and critical care nursing: A brief review of the literature. *Australian Critical Care* 10(4): 124-127, 1997.

A review of studies in the area of critical care in family nursing science: A comparison of qualitative vs. quantitative methods

Noriko SAKODA¹⁾ Takehiko ITO²⁾ Mizue SHIROMARU³⁾

1)Department of Nursing, School of Nursing and Rehabilitation Sciences, Showa University

2)Department of Psychology and Education Wako University

3)Graduate School of Health Sciences Sapporo Medical University

Abstract

The present literature review examined studies in the field of critical care in family nursing, and compared the qualitative and quantitative methods used in studies conducted in Japan. A total of 109 original articles published between 1994 to 2011 were identified using the Ichushi database. The titles of the 105 studies published after 2001 were analyzed using Text Mining Studio. Since 2001, when the majority of studies began to use quantitative methods, the number of studies has increased, and the percentage of studies using qualitative methods has continued to grow, especially between 2009 and 2011. Most studies on critical care in family nursing were published in four major critical care nursing journals. Analysis from *CINAHL* revealed that the number of studies in this field has rapidly increased since 2009. Most English- and Japanese-language studies used qualitative methods. Frequent topics of Japanese-language studies were psychological aspect of the family in quantitative studies, and needs with specific scales in quantitative studies. In order to elicit more effective and efficient support methods from multiple perspectives, further research should include the patients themselves as a part of the whole family system.

Key words : critical care , family, nursing, textmining